

還暦野球を楽しむ

中村 一男 (高6回)



私が野球のユニフォームを着て出かける姿を見て、「少年野球の指導をされているのですか」と近所の方に聞かれました。「いいえ、私がやっているんです」と答えますと、まずびっくりされます。

高田高校を昭和29年に卒業して、73歳の私が、還暦野球を始める切っ掛けとなりましたのは、66歳で「サンデー毎日」の老後の生活を送っていて、暫くしてからでした。世田谷の区報に新チーム設立で三行程の選手募集の記事を見てからです。野球をやめて35年にもなりましたので不安はありましたが、応募しました。

グラウンドに集まったチームのメンバーは元商社マン、大工の棟梁さん、不動産屋さん、ペンキ屋さん、ラーメン屋さん等、多彩でした。私のように何十年振りという人もおりましたが、大概の人は少年野球のコーチをしたりして、野球に携わっていました。高校時代は町内の

草野球、大学に入って二年から、準硬式野球部に入り、3年間補欠でやっていた位の私でしたから、プロ野球にスカウトされた人がいるチームの中では、やはり補欠がせいぜいでした。家に残っていたのは、準硬式野球のバット一本でしたので、スポーツ店に行って野球用具一式を揃えました。

練習を始めて、不安は的中しました。元々弱かった肩の衰えはみじめなくらいで、墨間のキャッチボールがやっとでした。初めは一塁まで走ると息切れがして、盗塁のサインが出ても手でバツ印をつくって断ったほどでした。思っただけでも体は予想以上にサビついていて、なかなか思うようなプレーは出来ませんでした。近くの体育館に行って筋トレをしたり、多摩川の土手を走ったり、野球の出来る身体に戻るのに、3年近く掛かったような気がします。

しかし、年相応の野球が出来るようになりますと、グラウンド外の楽しみが増えてきました。試合後の冷えたビールで乾杯して



始まる飲み会は、老体にムチ打って、打って、走って、守った、その疲れを吹きとばしてくれます。二次会は各自自慢のノドで歌いまくるカラオケ大会となります。朝早く試合に出掛けて、終電で帰ってきたこともありました。

還暦野球は二十数年前に群馬県で始まり、現在では全国で千チームくらいあると言われており、大会も盛んです。私がおります全世田谷野球倶楽部は東京都還暦野球連盟に所属しております、全部で60チームが実力別に8部に分かれ、春秋のリーグ戦を行うほか、70歳以上の選手によるリーグ戦もあります。私はそのPリーグで野球を楽しんでいます。

皆、腰が痛い、肩が上がらないと言いながらも、毎週、水曜日は試合、木曜日は二子玉川グラウンドでの練習を病気もせず元気にこなしています。1月は8日から練習を始め、最夏の8月は休みますが、暮れは12月25日迄練習をしております、野球じいさん達は家族の心配を聞き入れず、意気軒昂です。友達に会いますと別れ際に「無理すんなよ」と必ず言われます。私もそのつもりでやっていますが、いざプレーに入ると「若き血」がたぎってきまして、ホームへのスライディングなど、危ないから練習でもしていないことをやっと思い、プレーキを掛けるのが大変です。

私達の野球は、この地域で楽しんでいるだけではなくて、マイクロバスを貸切って温泉のある地方に遠征して親善試合をします。昼は野球で汗を流し、夜は古民家を改

修した料理屋で地ビール、地酒を飲み、その地の名物の料理を食べて、野球談義で大いに盛り上がります。相手チームのマネージャーが若くて美人とくると、チームメートが頭のはげてることも忘れて、我も我もとツーショットの写真に納まっています。

翌日、帰りは有名な観光地をまわって英気を養ってきます。バスの中はカラオケ自慢の面々がマイクを離しません。

私も年金生活に入るまでは、付き合いが会社関連の人達が中心でした。しかし、還暦野球を始めて異業種の人達と交流することが出来て、全く老後の孤独感を味わうことがなく、本当に良かったと思っています。また、毎週、試合と練習がありますので、この年になっても、少しでも成績を上げていこうと、向上心が芽生えてきます。空き地でバット・スイングをしたり、監督、コーチ（特に決めたものではなく、単なる教え魔）にアドバイスをもらって、次の試合までに何とか指摘された欠点を修正しようと努力しています。結果が出ると本当に嬉しくなりますが、教わって三歩歩くと忘れてしまうと言われていたように、身に付くまでは大変です。真にボケてる暇はありません。

私達の年齢になりますと、友と会えばどこが悪い、どこの病院に行っているという話が通例ですが、同期の小柳先生、森成先生から指導を受けて、今日もピンピンコロリとなれるよう、グラウンドで良い汗を流しています。